

第43回群馬放射線腫瘍研究会抄録集

日 時：2010年9月11日(土)

場 所：群馬大学医学部刀城会館

大会長：北本 佳住(高崎総合医療センター)

〈一般演題 I〉

座長：加藤 弘之

(群馬大学重粒子線医学研究センター)

1. 非小細胞肺癌術後の局所領域再発に対する放射線治療成績

村田 和俊, 石川 仁, 佐藤 友美

(群馬大医・附属病院・放射線科)

中野 隆史, 高橋 健夫, 江原 威

(群馬大院・医・腫瘍放射線学)

齋藤 淳一, 河村 英将

(群馬大学重粒子線医学研究センター)

【目的】非小細胞肺癌術後の局所領域再発症例に対する放射線治療成績を検討したので報告する。【対象と方法】2005年3月から2009年11月までの期間に非小細胞肺癌の術後再発で放射線治療を施行した症例のうち、再発が局所あるいは領域リンパ節のみであった22例を対象とした。男女比は男性17例、女性5例、年齢は59~82歳(中央値72歳)であった。放射線治療は1日1回2Gyで、総線量60~70Gy(中央値66Gy)を投与した。【結果】全例の生存期間の中央値は放射線治療開始から13.8ヶ月であった。Kaplan-Meier法による累積全生存率で見ると、2年および3年生存率は70.2%、30.1%であった。【結論】術後再発例であっても、局所領域再発では放射線治療で予後が改善する可能性があり、再発時の治療選択肢の一つとなり得ると考えられる。

2. 喉頭癌治療後の再発・転移診断におけるFDG-PET/CT検査の有用性

永島 潤, 伊藤 潤

(前橋赤十字病院 放射線治療科)

佐藤 良祐, 角田 小巻, 川島 康弘

星野 洋満, 佐藤 順一, 川上 規行

久保田利夫 (同 放射線部)

【目的】喉頭癌放射線治療後の再発・転移診断におけ

るFDG-PET/CT検査の有用性について検討する。【方法】2005年1月から2009年12月まで当院で放射線治療を行った喉頭癌99例のうち、治療後にFDG-PET/CT検査を施行した72例を対象として、遡及的に解析した。【結果】経過観察期間の中央値は34ヶ月(7-63ヶ月)、年齢中央値は67歳(48-91歳)、男性70例女性2例、全例扁平上皮癌、部位：声門/声門上/声門下；58/11/3例、T分類：T1/T2/T3/T4；24/38/5/5例、病期：I/II/III/IV；24/36/5/7例であった。このうち16例(16/72=22%)に異常集積を認め、その内訳は、局所再発5例、頸部リンパ節再発2例、遠隔転移2例(肺・縦隔1例、肺・肝1例)、他臓器癌7例(肺癌4例、食道癌3例)であった。異常集積を認めた症例の検査目的は、再発・転移のフォロー9例、再発時の病期診断3例、他臓器癌の病期診断4例であった。【結語】頭頸部癌は飲酒・喫煙と関連し、重複癌が多いことが知られている。FDG-PET/CT検査は再発・転移診断だけでなく、通常の画像診断では発見困難な重複癌の早期発見に有用である可能性が示唆された。今後、喉頭癌以外の頭頸部癌についても検討する予定である。

3. 放射線治療を行った木村病の2例

佐藤 浩央, 玉木 義雄, 岡本 雅彦

樋口 啓子, 工藤 滋弘, 牛島 弘毅

(群馬県立がんセンター 放射線治療部)

木村病は軟部組織中に無痛性で発育緩慢な腫瘤を形成する稀な疾患である。病理学的にはリンパ濾胞の増生と好酸球浸潤を伴う炎症性肉芽が特徴的である。血液学的には、好酸球増多やIgE高値を伴う。治療法は外科的切除、薬物療法、放射線治療が行われている。今回我々は、放射線治療が奏功した木村病の2例を経験したので報告する。いずれの症例も両側頸部に対し30.6Gy/17frの照射を行った。症例1：40代男性。約4ヶ月前から右頸部に腫脹があり、リンパ節生検で木村病と診断された。プレドニン内服を開始したが、内服量の増減に伴い腫瘍径も増減を繰り返した。3ヶ月間内服を続けたが寛解には至らず、放射線治療を行った。治療期間中から腫大リンパ